



江戸の端午の様子

『東都歳時記』 端午市井図 天保9年（1838）

〈五月人形〉

五月五日、端午（たんご）の節句です。平安時代にはショウブや蓬ヨモギを摘み、厄を祓ったといわれています。鎌倉時代以降、武家社会のなかで「菖蒲（しょうぶ）」が武道、武勇を重んじる意味の言葉「尚武（しょうぶ）」に音が通じることから、端午の節句は男の子の成長、出世を願う日として定着し、その日に家紋などの入った幟旗（のぼりばた）や、武具甲冑（ぶぐかつちゅう）を虫干しする風習が起こります。江戸時代後期になると端午の節句には、武家にならって裕福な町人までもが幟旗や武具甲冑、武者人形を飾りお祝いする風習が生まれます。今回の展覧では京都の「丸平」、東京の「永徳齋」という東西の名匠によって、明治末～昭和初期に製作された五月人形を展示いたします。

〈丸平と永徳齋〉

京都の丸平（まるへい）、大木人形店は明和年間（1764-71）に創業、屋号は丸屋といい、代々大木平蔵を襲名しました。大正から昭和初期にかけての東西を代表する人形師、四世大木平蔵（1860-1939）、五世大木平蔵（1885-1941）を輩出。雛人形や五月人形、有職人形、御所人形をはじめとした京人形の製作をたばね現在に至っています。

一方、永徳齋は東京を代表する人形司です。初代永徳齋山川雄七は、京の御用人形司「御雛屋」岡田家の職場頭でしたが、岡田家の養子となり岡田永徳として御雛屋の十二代を継ぎ江戸店を預かりました。しかし明治維新後に養子縁組を解消し、山川永徳齋として日本橋十軒店に人形店「永徳齋」を開きます。初代の長男である二代永徳齋山川慶次郎（1858-1927）は名工として知られ明治41年（1908）五十歳で、永徳齋を名乗ります。三代永徳齋山川保次郎（1865-1941）は初代の次男で、長らくアメリカで博物館に展示する人形の製作にあたりましたが帰国の後、三代をつぎました。四代永徳齋は二代の六

男で昭和初年からマネキン人形の製作にたずさわり三代永徳齋とともに永徳齋の経営を担います。しかし四代をつがず、昭和28年御人形司永徳齋を閉じました。

作品リスト

① 鍾 馗	二代山川永徳齋 (1858-1928)	大正	20世紀
② 八幡太郎義家	五世大木平蔵 (1885-1941)	大正	20世紀
③ 大将・太刀弓一対	三代山川永徳齋 (1865-1941)	大正	20世紀
④ 応神天皇と従者	五世大木平蔵 (1885-1941)	昭和前期	20世紀
⑤ 甲冑一式・太刀弓一対	五世大木平蔵 (1885-1941)	昭和前期	20世紀
⑥ 八幡太郎義家と従者	四世大木平蔵 (1860-1939)	明治後期	19-20世紀
⑦ 太刀弓一対	三代山川永徳齋 (1865-1941)	昭和前期	20世紀
⑧ 飾り馬	三代山川永徳齋 (1865-1941)	大正	20世紀
⑨ 直垂大将	二代山川永徳齋 (1858-1928)	大正	20世紀
⑩ 飾り馬	二代山川永徳齋 (1858-1928)	大正	20世紀
⑪ 甲冑一式・太刀弓一対	二代山川永徳齋 (1858-1928)	大正	20世紀
⑫ 神武天皇	三代山川永徳齋 (1865-1941)	昭和前期	20世紀
⑬ 鍾 馗	三代山川永徳齋 (1865-1941)	昭和前期	20世紀
⑭ 金太郎	三代山川永徳齋 (1865-1941)	昭和前期	20世紀
⑮ 飾り馬	五世大木平蔵 (1885-1941)	昭和前期	20世紀
⑯ 武内宿禰	五世大木平蔵 (1885-1941)	昭和前期	20世紀